
兎と酒

柳屋イナエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兎と酒

【Nコード】

N0400Y

【作者名】

柳屋イナエ

【あらすじ】

夜中も夜中、酔いも廻り始めた女に、呆れつつも素面の男は相槌を打ち続ける。

（前書き）

宜しければ、後書きも併せてお楽しみ下さい。

車の音がない。もちろん往来の音もない。時折、埋め合わせを忘れていたかのように、少し冷たい風が吹き抜けるだけ。それ以外に何にもない、本当に何も無い、肌寒い夜だった。

「先輩、そろそろ止めにしておいた方が」

彼女は酒の少しだけ残った硝子のグラスを揺すり、月の光に透かしておどける。そして不機嫌そうに、しかし笑みも混じった曖昧な表情で僕にきつく言い返した。

「日頃の鬱憤を晴らす為のお酒を、私から取り上げようなんて。なかなか大した度胸じゃない。煩いことは言わずに、もう少し付き合いなさい」

彼女は半ば喧嘩腰のような調子に文句を並べ立て、毎度のことが僕への忠告などは微塵も聞き入れてくれない。夜分に無理矢理呼び出され、酒の海で無闇に泳いでいる彼女の相手をするのが、最近では最早習慣になってきている。彼女のアパートから程近い位置にある公園のベンチで、これまた毎度のように、いつとも知れぬ酒宴の終わりを彼女の隣で待っていた。

ほんの一口、彼女は酒を含む。丹念に味わっているのかどうかは知らないが、そのままぐつと黙り込んで目を瞑ってしまった。しばらくして目を開いたかと思うと、深く溜め息をつく。そしてさっきまでの威勢は何処とばかりに、か細い声で歌を口ずさみ始めた。上手くは聞き取れないながらも、英語の歌であることくらいは解る。

親しみが湧くかと思いきや、即座にそれをあしらうような不安定なメロディラインの歌だった。明日は早めに起きなければならぬのと、歌を聞きながら途方に暮れつつ先輩の横顔に眼を遣る。

「いやあ、綺麗な月だ」

「そうですね」

確かに、綺麗だ。

「先輩に呼び出されるようになってから、月を見る機会が増えた気がしますよ」

僕は気の抜けた笑いを彼女に向けた。

「それは良かった。感謝して頂戴よ」

目を細めて彼女は月を遠くに眺める。欠伸を噛み殺しながら、左手で頬の辺りを掻いた。併せて右手に持つ酒が小さく波打つ。酒の匂いが微かに、こちらへ流れてくる。

「兎の作った餅が食べてみたいなあ」

餅ですか、と僕は苦笑いを返した。

「月には兎が住んでいて、餅を作っているんだ。幾ら何でも常識だと思っただけだ」

「大丈夫ですよ、知っていますってば」

僕はまた、気の抜けたように笑った。

「ちなみにねえ、私はその製法にとっても詳しいんだよ」

彼女は口を真一文字に結び、真剣な表情になる。

「だって私は、正真正銘の兎なんだから」

遂に先輩の下らない冗談が始まってしまった。流石に酒も廻ってくる頃だろうか。先輩は深く酔うと、どうしようもない冗談を言う癖があった。面倒なのでこれ以上飲ませるわけにはいかない。腕時計を見れば、深夜二時をとくに過ぎていた。

今晚はお開きにしましょうと言いかけて、彼女はそれを遮るように喋り出す。

「私だってね、出来ることならお酒なんて飲みたくないよ。飲まないで済めばどんなに良いか」

包むようにグラスを持つ両手の指を、彼女は不規則に動かし続けていた。一時、爪が当たって、音が鳴ってしまう。その冷やかで矮小な声を響かせるには充分過ぎるくらいに、夜中の公園は静けさに隅々までを満たされていた。

「でも、こんな夜中にひとりぼっちでいるとこれ無しじゃあね、怖くて怖くて、涙が溢れそうになるんだ。ほら、私は兎じゃないか。どうしてなんだろうねえ」

痛く痛く、切なげな声で。

「さあ、どうしてでしょうかね」

そつけない体で返事をしたけれども、本当は何と言えば良いか目星も着いている。でもそれを口に出すことはしない。出来ない。ゆるりと風が吹き抜けて、僕は肌寒さに両手を擦り合わせる。

「しかしですね、先輩。いつまでも酒に頼り切りというのも、やはりどうかとは思いますが」

彼女の爪がグラスに当たる。いや、当てているのかもしれない。グラスの底に残った酒は月に照らされ、ゆらゆら、嫌に透き通って見える。

「じゃあ、どうしたら良いわけよ」

風が吹いた。

「自信はありませんけど、幾つか思うところもあります」
「幾つか、だなんて嘘ついちゃってさ」

彼女は、足を大きく、わざとらしく投げ出した。

「ばれちゃいましたか」

顔が一気に火照る。

「どうしたらいいのか、今度教えて頂戴ね」
「もう解っているくせに」

彼女はグラスに唇を付けて、さほども無い酒の残りを一気に飲み下した。空になったそれを弄ぶようにして、またおどける。さっきよりもずっと御機嫌そうに。

「じゃあもう、これは要らないか」

彼女は傍らに置いてある小さな瓶を爪で何回か鳴らした。僕は慌てて言う。

「残りは僕が頂きます」

「あれま、飲まない主義じゃなかったの」

「そうもいかないんですよ」

僕はそう言つて瓶を手取る。この火照りは、酒のせい。気恥かしさを誤魔化そうにも、それくらいしか思いつかないのだから。

（後書き）

男女、というのは動かし易い題材だなと思います。コントラストが簡単に付くからでしょうか。

二千字に少し及ばない程度の中に似た表現が散見されるあたり、やはり言い回しの乏しさを痛感させられます。しかしヴァリエーションを持たせようとすると、そればかりに終始してしまい、今度は流れの統一性を欠いてしまう。何とも難しい話です。まだまだ、ぎこちなさが取れそうにありません。

何はともあれ、御拝読賜り、誠に有り難う御座いました。次回も宜しければ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0400y/>

兎と酒

2011年10月30日15時07分発行